



「子供のため」先生目線で考える

〔奈良〕

帝塚山大教育学部

第1期生が学ぶ帝塚山大学教育学部こども教育学科（奈良市学園南、定員100人）。「教育に関する記事」を新聞から探して要約し、自分の考えを書く課題に毎週取り組んでいる。これまでも、新聞を使った授業は単発で行われてきたが、徳永加代准教授は「継続しないと深まらない」と話す。「新聞で世の中がどうなっているのかを知り、先生目線からどう対応すればいいのか考え続けてほしい」とも強調する。
（編集企画室 数内朋之）

教育、事件・事故…記事を要約し発表



①新聞記事についての理解を深めるため、グループで話し合う学生たち
②共同研究室では、新聞各紙を読むことができ、目を通す学生も少なくない
＝いずれも奈良市学園南の帝塚山大学

この日の授業で、学生たちは5、6人ずつのグループに分かれた。学生たちはそれぞれ、4月からこれまでスクラップしてきた記事の中から1つを選んで提示。グループ間で記事内容と要約を共有し、それぞれ意見を言い合った。

その後、共有した記事の中から1つを選び、グループ間で議論。学生たちは反対意見や改善策などを語り合いながら、小型ホワイトボードに話し合った結果を書き込んでいた。

最後に、グループの代表者が全員に向けてプレゼン。代表者の1人は大学の授業時間を90分から100分に増やそうとする動きが広がっているとの記事について意見発表した。記事では、授業回数を減らして夏休みを増やすことで留学などがしや



すくなる反面、学生の集中が続かない可能性を指摘している。学生は「学生主体のアクティブラーニングを実践するなど、教員の工夫が必要」と、グループで話し合った結論を発表した。

徳永准教授は「先生目線で新聞を読むことで、いさ先生になったときにどうすればよいか考えることができる」と指摘。実際、この課題を始めてから、子供が巻き込まれた事件や事故を、授業時間外でも話したりする学生が増えたという。勝美芳雄・教育学部長も「根拠を明確にして自分の考えを表現すること

は、先生として重要。比較的短い文章の中に的確に事実や論点が盛り込まれた新聞記事は格好の教材」と期待している。

ネットの記事でも良いが「必ずプリントアウトしてから、読み直すように」と授業で学生たち呼びかけている。「ネットだと、どうしても読み飛ばしてしまう。線を引きながら読み進めてほしい」とも。

学生たちに紙の新聞に親しんでもらおうと、共同研究室に新聞各紙を置き、自由に持ち出しできるようにしている。同学科1年生の増田白華さん（18）は「テレビだとすぐに違う話題になってしまふ。新聞だと何度も読めるので理解が深まる」と紙の新聞のメリットを強調する。

200字の要約を課しているのも、この課題の特徴だ。徳永准教授は「教師は「伝える力」が必要になってくる」とその狙いを話す。また、教員採用試験などでは小論文の試験があることから、文章力向上の狙いもあるという。「今後は同級生の意見を書き込めるようにしたい」といい、学生の将来を見据えた授業の改善を続けている。